

April. 2006

Vol.2

— 卷頭言 —

「新しい歌を主に歌え。

全地よ。主に歌え。」

(詩編96編1節)



副理事長 林 桂司

「新しい讚美歌はいつ出来る予定ですか?」「福音派の新しい讚美歌を早く発行して下さい。」

私が、福音讚美歌協会に関わっていることを知ると、そのように語りかけて下さる方々が多くなってきました。私たちは、そのような声に本当に励まされています。

福音讚美歌協会が立ち上げられた経緯をあらためて顧みると、いつもそこには教会の声があったことを思います。そして、私たちは、その「教会の声」を大切にしてきました。ですから私たちは、教会の決断、教団の決断の前にいつも謙遜であろうとしました。

今、その教会の声が、一層大きな声となり後押ししてくれているように感じています。

福音讚美歌協会の働きの、目標の一つは、「福音主義の見地からの讚美歌集の編纂」であります。私たちは、その先を見えています。それは、「会衆讚美の振興」であります。わかりやすく言えば、教

会が、まさに神への讚美の群れとなり、さらには、一人でも多くの神を知らない方々が、その生き生きとした讚美に心打たれ、もっと大きな讚美の群れとして成長することです。

現在、理事会の下に、讚美歌委員会が発足し、委員の人選も終わり、まさに新しい讚美歌集の具体的な編纂がスタートしました。これからは、このジャーナルなどを通して、新しい讚美歌もお目見えすることでしょう。

どうぞ、一層ご期待ください。そして、祈ってください。再三、強調させて頂きませんが、この働きは、「教会の声」にかかっている働きですから。真に教会が生み出す教会の讚美歌。それが、私たちの夢なのです。

最後に、この働きを覚えて祈って下さる方々には、是非、賛助会員になっていただきたいと願っています。詳しくは、「入会のしおり」等をご参照ください(ホームページからも入会できます)。



が歌う理由は何であったのか？ この問いに先立って確認しておきたい事は、この「なぜ？」の答えは一つでないという点である。音楽と賛美を巡る聖書の記述、そしてそれに続く教会歴史において、会衆の歌の「なぜ」を巡る「唯一誤りの無い」答え、は見出せない。それぞれの時代に、それぞれの地域の教会や教派が、様々なレベルの神学的な深さでこの問いに取り組み、幾つかの答えのタイプを導き出してきたのである。

### 3. なぜ会衆は歌う？

#### －幾つかのタイプ

では歴史の教会に見られる、会衆賛美の理由とは、どのようなものに分類できるのだろうか？「礼拝」というコンテキスト、そして「歌う」という形態に分けて、理由を整理してみる事とする。

#### (A) なぜ礼拝で歌う？

つまり、なぜ「みんなで」、「一斉に」、「共同の礼拝で」歌うのか？ という問いである。

- 1) **一致の基盤** として - 歴代誌の聖歌隊の記述、ローマ書の勧めを前史としつつ、古代教会において最も顕著な会衆賛美の理由は、「一つの教会の印としての一つの歌声」である。ここでは音楽の種類ではなく「会衆全体が一つになる」一体感、それがより重要な事である。個々人の「音楽的好み」などと言う「現代的」な問いは全く影を潜めている。宗教改革期にも同様の理解は見られる。
- 2) **会衆の参与の機会** - 語ると覚える。歌うと目が覚める。礼拝への会衆の参与、という事を考える時、「歌う」という行為は、「読む」という事以上に能動的足りうる。よってルターは万人祭司の原理の実現手段として会衆賛美を用い、またカトリック教会は第二バチカン公会議において、会衆の「能動的参

与」の手段として「会衆の歌」を位置づけた。そういう意味では「会衆が取り残された会衆賛美」(?) なるものは、問題である、と思う。

- 3) **霊的ないけにえ** - 旧約の礼拝において不可欠であった「いけにえ」は、「ただ一度の完全ないけにえ」であるキリストの十字架の犠牲によって完成した。この事を論ずるヘブル書は、しかしまた同時に「賛美のいけにえとしての唇の果実」を神に捧げる事をも勧めている。「賛美」(ここでは限定的に考える)が、神へのいけにえであるとする、その「品質」そして献上する側の「心」が問われる事になる。「いけにえ」は、無造作に捧げるべきものではなく、物質的・精神的両面において「最高のもの」でなければならない。

#### (B) なぜ「音楽を伴い」歌う？

語るのではなく、歌う、という事に関する問いである。

- 1) **霊的な喜びの表現 / 心の叫び** - 好きだから、恵まれるから、励まされるから歌う。ルカにおける「神の業」に触れた賛美の伝統である。理屈ぬきで、「言葉がはじけて歌になる」のである。ルターは、福音に触れると人は「驚き、喜び、叫ぶ!」と表現した。
- 2) **宣教の手段** - 音楽は人の心を神へと向ける「ポテンシャル」を持つ。誤用もありうるが、積極的な効果も大きい。古くはアウグスティヌスを回心へと導いた歌声、現代的には伝道集会の招きの歌、等。語られる内容を「拡大する」音楽の機能に注目した理由である。
- 3) **心に刻み付ける** - 時として、説教の言葉よりも、歌う言葉は、人々の心に残り、刻みつけられる。よって、教会の教育・一致に、会衆の歌は大いに参与しうるものである。「何を歌うか」と「自分たちは何者であるか」は、密接に



礼拝でオルガンプレリウドが奏されるようになった歴史は、オルガンという楽器が教会に定着した歴史そのものと重なります。教会の楽器として用いられていくよりも前に、オルガンが何らかの「機能」を担って用いられた歴史を辿っていくと7世紀のビザンチンの宮廷儀式に辿り着きますが、皇帝の宮廷儀式の入場行進に伴って移動式のオルガンが演奏された、というのがそれです。皇帝が市中の教会を訪問し「教会に入る時」にも、そのような入退場の音楽は奏されました。その入退場の音楽の習慣が、カトリック教会のミサに受け継がれ、司祭のミサへの入退場の音楽に転用されたというのが、少し意外な教会におけるオルガンプレリウド誕生の経緯であろうと思われます。プロテスタント教会は「入退場の音楽」という位置づけはしませんでした。しかし、多くの場合、その習慣を切り捨てはせず、そこに新しい意義を付加し用いてきたのだと思われます。今日の、ドイツプロテスタント国教会の前奏の捉え方は示唆に富みます。

**前奏・オルガンまたはその他の楽器によって奏させる前奏は、神の民が礼拝を前に思いと心を静め、会衆が共々に礼拝に向けて一つとなることを助ける。前奏の種類と長さは、その**

**礼拝式の特質、その主日、そして会衆の状況に合致した“モデル”であるべきである。**

「南ドイツ・ヴュルテンベルク州のプロテスタント礼拝、P.16」より

「礼拝に向けて一つになることを助ける」「状況に合致したモデルであるべきである」とあるように、この説明が「前奏」を、「礼拝」という教会の営みに呼応して考えるべき課題と捉えていることがわかります。「一つになる」ことを助けることにならないならば、前奏をなくすところから考えれば良いでしょう。その中心である「礼拝」に、音楽のあり方は呼応し続けていくことが求められるでしょう。

最後に具体的なお勧めをいくつか致します。奏楽奉仕者の方には、色々な調性、4拍子系・3拍子系等異なる拍子、喜びを基調にした曲・内向的な静けさを持った曲など、異なる種類の前奏曲を、普段の練習から少しずつレパートリーに加えられることをお勧めします。それによって、礼拝の主題・教会暦等に呼応して選ぶときの選択肢が広がるでしょう。コラール前奏曲のレパートリーは有用ですが、それに安住もしないように気をつけましょう。



マクシミリアン I 世(1493- 1519 年)の凱旋で使用された移動式オルガン

## 「さんびかの前奏～会衆讃美歌唱への道備え～」

何人かの参加者に実際にオルガンを弾いて頂きながら、さんびかの前奏について共に考えました。さんびかの前奏には、「さんびかの認知度」「会衆の人数」「楽器や礼拝堂の状況」等を考慮しつつ『会衆讃美』を導くことが期待されます。実際さんびかの前奏には、最低限「調を示すこと」「メロディーを示すこと」「前奏の終わ

りを明確にすること」が求められますが、加え「会衆とその状況にふさわしい音量・音質」「さんびかの内容のキャラクターを表現する」こと等が期待されます。奏楽だけでなくさんびかの学びは有益でしょう。福音讃美歌協会はそのような学びの機会を考えていきたいと思ひます。

### 委員会活動報告

#### 讃美歌委員会報告

福音讃美歌教会発足当時から、多くの皆様のご期待とお祈りの中にあつた「讃美歌」と「讃美歌集」に関する働きを受け持つ「讃美歌委員会」が設置され、第1回の委員会が2月上旬に開催されました。理事会に承認された委員の面々は以下のとおりです。

井上 義 (同盟・等々力教会)  
武田夕紀 (同盟・下馬福音教会)  
土井康司 (同盟・下北沢聖書教会)

植木紀夫 (JECA・朝顔教会)  
中山信児 (JECA・菅生キリスト教会)  
斉藤一誠 (JECA・浜田山教会)

長沢 / 鴻海 (ことば社・オブザーバー)

神学、演奏、作曲、詩、出版、等の、様々な角度からの専門的知識、それに牧師、牧師夫人、音楽主事、信徒、等

の様々な教会的立場からの代表、を考慮しての面々です。

会合は、当面は月一回ペースとし、夏休みあたりをめどに、歌集の規模、編纂理念、編纂手順、等に関して、委員会レベルでの見解の一致を目指します。それと平行する形で、個々の作品の検討に入りますが、とりあえず毎回 5～6 曲の作品を検討し、最初の1年で 50～60 曲ほどを精査できたらと考えています。委員長個人の現在の目測としては、遅くとも5年以内には、具体的に形のある印刷物にして諸教会に評価を問う事ができたらと考えています。

毎回議論の成果を理事会に報告し、定期的に当ジャーナル等を通じて、皆様に進捗状況をご報告させて頂く所存であります。どうぞよろしくお願ひいたします。

[文責: 担当理事 井上 義]

第3回 福音讃美歌協会 教会音楽セミナー

講演

「現代『讃美歌集』事情～「讃美歌」「聖歌」などを手がかりに」

講師：井上 義

“Hymn Explosion”と呼ばれる讃美歌量産運動が1950年代の英国に始まり、この運動は80～90年代には米国において、教会史上かつて類例をみないほどの大規模な讃美歌創作運動に発展しました。この運動は、1997年刊行の「讃美歌21」において、初めて本格的に日本に紹介されました。

また、同じく1950年代の英国で、聖公会司祭による“フォーク・ミサ”が発表され、やがてはそれを契機に「20世紀教会軽音楽」グループが生まれました。そして少し遅れて米国では、“Jesus Movement”の台頭や、“Gaither Trio”等の活躍があり、これらの動きの後に、いわゆる“Praise&Worship”運動が世界中に広がりました。

今日、新しい讃美歌集が編纂される時、これら二つの運動とどう対峙するのかが問われています。

また、1990年代以降、日本でも幾つかの主要な讃美歌集が刊行されていますが、普及のためでも攻撃のためでもなく、純然と賛美歌学的な観点からこれらの歌集を評価・位置づける、そのような営みは、これまであまりなされてこなかったように思います。その最大の理由は、讃美歌集を論じ評価するための、神学的な語彙が日本の教会、とりわけ福音派の諸教会において、欠落しているからのように思えます。

単に「好き」「嫌い」ではなく、現代讃美歌学の文脈から、できるだけわかりやすく具体的に、日本の教会にとっての「新しい歌」そして「新しい讃美歌集」を考えていきます。

※開催日時・場所については、追ってご案内致します。



**福音讃美歌協会  
総会開催のお知らせ**

日時 **2006年7月17日(月・祝)**  
**13:00～16:00**  
場所 **日本同盟基督教団  
世田谷中央教会**

**=会員申込み方法=**

会員の種別は**正会員**(教会・教団・教派等)、**準会員**(各個教会、団体等)、**賛助会員**(各個教会、個人等)の三種類です。賛助会員につきましては、入会申込書をご請求いただき、郵送又はFAX送信していただく、もしくはホームページより入会申込みに必要事項をご記入の上、送信していただくことにより入会することができます。正会員、準会員につきましては、協会へ直接お問い合わせください。入会のしおりを郵送致します。

